

井伏鱒二「黒い雨」——歴史小説における史実と虚構

野中寛子

一 はじめに

一六〇編を上回る論考のある「黒い雨」のさまざまな問題点については、すでに語りつくされた感がある。概観すれば、「黒い雨」の内容への賞賛¹⁾と、構成への批判²⁾、そして実在の手記を盗用したのではという問題提起³⁾と、それに対する反論⁴⁾を中心にしたものが多数を占める。その中で少数派だが、歴史小説「武州鉢形城」(昭和三十六年八月)と昭和三十七年七月「新潮」と「黒い雨」の近似性について言及した論がいくつか存在する⁵⁾。

涌田佑は『二つの話』『武州鉢形城』『黒い雨』の三作は、戦後井伏文学の重層の実験的手法を見ていく上で核となる重要作品である⁶⁾。すなわち、それら三作で現在と過去と舞台が「重層」していることが共通点だという。大越嘉七は「井伏文学が積み重ねてきた方法が『武

州鉢形城』の実験を経て『黒い雨』に集大成されている⁷⁾と述べ、とくに「日記形式」の使用の点で「黒い雨」との近似性を指摘している。また松本鶴雄も、一見本物の資料によったかのように見せかける「贗造した資料」を井伏が用いている点について「武州鉢形城」との類似性を認めている⁸⁾。

とはいえ、涌田論のいう現在、過去の「重層」が『二つの話』『武州鉢形城』『黒い雨』にある、という問題については、この三作以外にも、涌田氏のいう時代の「重層」を見いだせる作品があり、「贗造した資料」を用いている点をあげた松本論、「日記形式」をあげた大越論に関しても、「黒い雨」「武州鉢形城」以外に、そういった要素が相似した井伏の歴史小説はおおい。またこれら三つの論が指摘した点のほかに、井伏の歴史小説の中に、

「黒い雨」との別の共通点も見ることが出来る。

本論は「黒い雨」が井伏鱒二の歴史小説の手法、歴史観と密接にかかわっていると仮定して、歴史小説の要素から、「黒い雨」の表現の意味を探ることを目的としたい。

では、「黒い雨」に見られる特徴を、先行研究の指摘も含め四点示す。

① 資料そのまま、見せかけの資料

重松静馬氏の被爆手記「重松日記」、岩竹博医師の書いた「広島被爆軍医予備員の記録」などの実在の資料が、「黒い雨」ではそのままの形で多く用いられている。ほんたいに、矢須子日記、シゲ子の綴る矢須子の病状日記などは、井伏の完全な創作である。いわば見せかけの資料を創作して実在の日記、資料と同じように並列させている。資料を引用するときに、内容が資料に準じているだけでなく、日記という形式的な枠までも維持している。

② 並行する構成を持つ物語

「黒い雨」は矢須子物語の時間軸、すなわち「終戦後四年十箇月目」の広島郊外の小島村と、重松日記の時間軸、すなわち昭和二十年八月六日の原爆投下から終戦の

八月十五日までの二つの時間と場における物語を、同時進行させて一つの物語にまとめている。過去の一定の期間、現在の一定の期間をそれぞれ切り取って、重ね合わせ対照させるような物語構造をもつ。

③ 主人公の主観吐露

「黒い雨」では、主人公および登場人物が感情を直截にあらわす台詞がたくさんある。本来こうした主観吐露は井伏作品では珍しい。例として本文を引用してみよう。

今までのこの宇宙の中に、こんな怪しなものを湧き出させる権利を誰が持っているのだろうか。(閑間の言葉 三章)

戦争というものは老若男女を鬪り殺しにするものだということがよく分かりました。(シゲ子の言葉 四章)

戦争はいやだ。勝敗はどちらでもいい。早く済みさえすればいい。いわゆる正義の戦争よりも不正義の平和のほうがいい。(閑間の言葉 十一章)

わしらは国家のない国に生まれたかったのう。(兵隊の言葉 十一章)

④ エピソードの断片と、テーマの拡散

「黒い雨」のメインのストーリーと関係ないエピソードが、言葉の接ぎ穂から接ぎ穂へと語られる。たとえば、閑馬が矢須子の結婚問題の誤解の原因となった、第二中学に勤務して被爆したというわけについて語るとき、途中から「小島村出身の挺身報国隊」から聞いた第二中学の学生たちの消息について矢須子とは関係のない挿話を詳しく語り始める。話は矢須子の結婚問題からほとんど離れて中学生の被爆の経験が語られるのである。(一章)

また一度きりしか登場しない人物も多く、彼らの独立したエピソードが点描される。たとえば、閑馬がにわか僧侶の役を命じられ、アサリの闇屋タカを弔う場面がある。まずタカにまつわる挿話が始まり、タカの倅が山口県のある島に存在する人間魚雷の学校へ志願した挿話へと展開させる。(十章)

このように、独立したエピソードの断片を累積するかたちで「黒い雨」の文章量が増大、結果的に長編となっている。そのエピソードはそれぞれ印象的だが、エピソードの断片が互いに関連しあわなかつたり、一度きりしか登場しない人物たちが多いため、ストーリーの求心力が弱まり、中心を貫く矢須子の物語が拡散するという特徴を持つている⁹⁾。

以上のように、「黒い雨」がもつ四つの要素について、歴史小説と関連付けながら考察したい。今回は枚数の関係上、①に重点を置いて論じていく。

二 資料と事実性への執着

先にも述べたとおり「黒い雨」は、「重松日記」に書かれた重松静馬氏の被爆体験に負うところが大きい。「黒い雨」で井伏は「重松日記」以外にも「石竹医師の手記」や取材での談話録音、聞き書きなどを重視している。作品の中でそのまま資料原文を用いている箇所は尋常でなく多い。資料である「重松日記」と「黒い雨」を比較してみよう。

「重松日記」

抱いていた赤ん坊の眼に、灰かほこり様のものが一杯たまり、吹き除き乍ら助けを求め、誰か水をく

れと、声の限りに叫んで居る女。あらん限りの声で、泣き乍ら走る女や子供。痛さを訴えるもの、オーオーと云い、口を開き、両手を前上に差し上げて走る男。座って両手を空に無闇に振っている大の男。腰を抜かしたとでも云うのであるか、往來に座り込んで合掌し、何様かに一心に祈っている初老の婦人。この婦人に気づかず、小走りに来てつつかかり、前へのめり、起き上り乍ら、罵倒して走り去るもの。阿鼻叫喚の巷などという句があるが、この語句など、幾百千積み重ねても、表現も形容もできぬ様相だ。

「黒い雨」

赤ん坊を抱いて「水をくれ、水をくれ」と叫びながら、その声の合間に、赤ん坊の眼に息を吹きかけている女も居た。赤ん坊の眼には、灰か何か一ぱいたまっていた。声を限りに叫んでいる男、悲鳴をあげながら走る女や子供、苦痛を訴えるもの、道端に座り込んで、空に向けて差し出した両手を無闇に振っている男。崩れ落ちた瓦の山の脇で、合掌瞑目して一心に祈っている初老の婦人。小走りに来てこ

の婦人に突き当り、「ばか野郎、気じるし」と罵倒して走り去る半裸体の男。ぶらりぶらりと歩いている男。四つ這いになって「おうおう」と泣き声をあげながら、わずかずつ進んでいる白ズボンの男。

これは横川駅から三滝公園に通じる国道を、僕が一町たらず歩いていく間に見た光景である。

このように井伏は、資料に記されたものを、ほとんどそのまま用いている。だが、井伏が「黒い雨」創作において依拠したのは、この「重松日記」や、岩竹博医師の手記だけではないようだ。井伏が重松氏にあてた書簡^⑩を見ると、創作の過程がよく分かる。

たとえば昭和四十年二月二日付の重松氏宛井伏書簡は、「黒い雨」でシゲ子の綴る「広島にて戦時下に於ける食生活」の成立を示している。井伏は書簡で「空襲当時、広島のお宅の近所の家の毎日の食生活を御教示願えないでせうか。つまりどんなに拙いものを食べてみたか、それが知り度ぬのです。お宅の献立もお知らせ願ひたいのです。詳しいほど結構です。失礼ながらお願いいたします。」と書き送る。そして重松氏が当時の食生活につ

いて数度井伏へ書簡を送り、井伏はそれを参照しながら「シゲ子の食生活日記」を書いたと推測できる。

この後も井伏はかさねて重松氏に調査の依頼をし、自らも取材を行っている。昭和四十年八月二十四日、重松氏あて井伏書簡では、「千田町に於けるお宅の隣組の人たち」が罹災、避難生活の後どうなったか、「家屋疎開の手伝ひをしに小島村から広島へ行つてゐた」甲神部隊のことを問い合せている。「見聞談を知りたいのです。そのためには私も小島村に出かけていく必要があると思ひますが、もし出かけて行つたら話を聞かせてもらへるでせうか。」とある。また九月四日の重松氏あて井伏書簡では「書類と御手紙をいただきました。御多忙中のところ広島までお出かけの由、まことに相済みません。御礼申し上げます。被爆のことについての話、今年中にノートをとりたいので農閑期に小島へ伺ひます。」十一月十八日書簡には「今月末から来月早々には出かけるつもりです」と、取材や資料収集に意欲を見せている。このとき連載は十三回目、作品も後半に差し掛かっている時期だ。しかしこの時点で資料が不足していたから、重ね

て取材をしたというわけではなく、連載開始直前の、昭和三十九年十二月十日に、井伏は重松氏にむけて「大体のところ資料をまとめることが出来ました」「小島で談話して下さつたかたがたにお礼状を出すべきですが」と書き送っているので、連載前から「重松日記」のほかに重松氏と二人三脚で資料を収集していたことが分かる。このように井伏は作品が進むほど資料収集に過剰にのめりこみ、「重松日記」以外の場所からも多く材料を集めようとしている。さきほど「黒い雨」の特徴④でも述べた、根幹のストーリーと一切無関係に断片的なエピソードが集積される箇所は、おそらくこういつた取材や聞き書きをもとにして成立したと考えられるのである。

本作品についての「重松日記」の盗用ではないかというおおくの選考論が指摘している点は、引用という行為のモラルを問うものであることは言うまでもないが、とはいえ「重松日記」という質、量ともに相当に完成度の高い資料がはじめにありながら、さらに取材を重ね、新しい資料を求める井伏の態度に、資料それ自体への執着を感じる。しかも、そうやって取材資料なり他者の手記

なりを引用し続け、断片的なエピソードを書き連ねることとでストーリーが拡散する危険性さえ度外視しているふしもある。その理由はいつたい何なのであろうか。

三 資料のかたちをした物語

磯貝英夫が、井伏の「長編の多くは、漂流記ものに典型的に見られるように、記録や日記に枠を借りて書かれている」⁽¹⁾といっているのとおり、井伏はたんに資料を基にして作品を創作するだけでなく、形式の面でも日記、資料の形式をもつ作品を多く書いている。「黒い雨」では、主人公閑間重松が「図書館に納めるわしのヒストリー」として清書していく日記だけでなく、「シゲ子の食生活日記」のほか、「矢須子日記」、シゲ子の綴る矢須子の「病状日記」、奇跡的に被爆による大火傷と病から生還した「岩竹博の手記」といった、日記や手記がたくさん織り込まれている。複数の作中日記をもつようなかたちで手記や日記が、ひとつの作品の内側で多様に展開されているのである。

ところで井伏の「青ヶ島大概記」(昭和九年三月『中

央公論』)という作品がある。この作品は『八丈実記』の「伊豆国付八丈島持青ヶ島大概記」を粉本にし、「黒い雨」と同じように資料を多く引用している作品だ。井伏はこの作品について、

資料は伊馬春部君が伊馬君の恩師の折口信夫氏のところから借りて来てくれたもので、私は記録文学風にするつもりから資料の文体を真似ながら書いた。(井伏鱒二「社交性」昭和三十一年十月『小説公園』)

と説明している。この作品は、内容の点で資料に拠ってもいるが、それだけでなく「資料の文体を真似」る、という形式までも資料の姿をとった作品なのである。

周知の話だが、この作品について太宰治が『井伏鱒二選集』第二巻の後記(昭和二十三年六月 筑摩書房)でふれて、間接的に粉本の盗用を批判したことがある。井伏自身も「社交性」で、そのことを告白している。あまりにも有名なエピソードなのだが、井伏の虚構と事実に対する考え方を示唆するものとして、いま一度紹介したい。太宰はたまたま井伏家に立ち寄り、「青ヶ島大概記」

の締め切りに追われ、徹夜続きの井伏を見る。そして清書作業を手伝うのだが、そのときの印象をこのように語り、作品を激賞する。以下は太宰による『井伏鱒二選集』後記からの引用である。

「島山鳴動して猛火は炎々と右の火穴より噴き出し火石を天空に吹きあげ、息をだにつく隙間もなく火石は島中へ降りそそぎ申し候。大石の雨も降りしきるなり。大なる石は虚空より唸りの風音をたて隕石のごとく速かに落下し来り直ちに男女を打ちひしぎ候。小なるものは天空たかく舞いあがり、大虚を二三日とびさまよひ候。」

私はそれを一字一字清書しながら、天才を実感して戦慄した。私のこれまでの生涯に於て、日本の作家に天才を実感させられたのは、あとにも先にも、たったこの一度だけであった。

ところが、この火石の降る部分は「八丈実記」本文とほとんど違う文章である。原本と重複する箇所をさして「天才」とほめることは皮肉に他ならない。太宰は井伏にだけわかるような方法で引用を糾弾している。こ

れに對し井伏は、「私はこの皮肉を自分に噛みしめなければならぬ」とあつさり降参する。では、この昭和二十三年の出来事以降、井伏はほんとうに猛省して、資料の引用を一切やめたのだろうか。ところが、井伏はその後もかたくなに資料に依つた作品を書き続けた。昭和二十九年の「漂民宇三郎」、昭和四十九年の「黒い雨」以外にも枚挙に暇がない。「皮肉」を「噛みしめなければ」といふ言葉に感わされてはいけぬ。井伏はどこか確信的に資料をそのままに近い形で用い、以降もその方法を維持している。

太宰は井伏が「青ヶ島大概記」のテクストをそのまま用い、『八丈実記』に内容が依拠していることを批判しているのだが、ここでは内容だけでなく形式までも資料の形をとっていることに注目してみたい。この作品は、噴火、罹災の詳細を、幕府に送るため島役人が書きとめた公文書という形式で、擬古文体に終始しており、その文体は読みやすいとは言えない。さらに井伏は、太宰の批判に気づき、自覚してから後も、引きつづき「黒い雨」のような、あたかも資料それ自体のような形をもつ物語

を書きつづけている。井伏は資料それ自体の持つ性質、たとえば客観性、リアリティと言う側面を追究し、創作の中にそれを再構築しようとしていたのではないだろうか。

四 史実と創作を交ぜ合わせる事

このように井伏は、資料のような形で作品を書く方法を多用しているのだが、一方で資料や日記をそのまま引用しているように見せかけて、じつはまったく架空の記録や日記を作っていることがよくある。

たとえば――①でも述べたとおり「黒い雨」の作中に展開される「矢須子日記」は、実在する「重松日記」等をもとにした文章とことなり、井伏がすべてを創作した架空の日記である。ヒロイン高丸矢須子のモデルは、読みはそのまま同じ高丸安子という人物で、「重松日記」を書いた重松静馬氏の姪である。彼女は「大戦中は広島
の重松宅に同居」し、「原爆の際は直接被爆はまぬがれたが、その後、二次放射能の影響を受け健康を害した」②
「黒い雨」の矢須子と同じ境遇の女性だ。井伏ははじめ、

彼女の日記をもとに「姪の結婚」物語を創作することを想定していた。だが実際は、いざ執筆の段階で、重松氏が安子の親族に日記の貸与について問い合わせると、「遺族の人が、療養日記は見るも涙の種なので燃してしまっ
た」③ことがわかる。ゆえに作品中の「矢須子日記」はすべて、土壇場で資料のないことを知った井伏が創作したものだという。以上のように、井伏は「黒い雨」の中に、見せかけの資料すなわち「矢須子日記」、そして実在の資料「重松日記」「岩竹医師の手記」をもとにした日記体の文章、新たに取材して得た資料、「シゲ子の食生活日記」等々を交ぜ込んでいることがわかる。

こういった見せかけの資料と、実在の資料をつき交ぜて、ひとつの作品の中に入れる方法がもつとも顕著に現れた最初の例が、さきほど紹介した「青ヶ島大概記」ではないだろうか。

物語は、伊豆諸島の青ヶ島における安永九年、天明三年の大地震と火山の噴火の物語で、俯瞰的視点から島民の八丈島への避難、そして帰島、復興するまでの辛苦の生活を描いたものである。文章は、災害を調べる江戸幕

府の役人に送る書簡の形をとって天明時代の資料を判読していくような形の文章になっている。この作品について宇野憲治は『青ヶ島大概記』論—資料と虚構をめぐって—⁽⁵⁾で、『日本庶民生活資料集成 第一巻』（昭和四十三年七月 三一書房）の『八丈実記』を解説しながら本文中での資料そのままの箇所と、井伏の虚構の箇所とを丹念に腑分けしている。そして「酒樽を積んだ漂流船の話（290・9～290・12）、山焼の前触れとしての鯨の話（293・3～293・10）片岡に残った一本の樁の木の話（294～295・1）、八丈島へ避難した『身ぶつつか』な人々の話（298・12～299・7）以下、原典の『八丈実記』にない総数十篇の井伏創作と思われるエピソードをピックアップしている。井伏が『八丈実記』そのままと、創作エピソードを読者にわからないようにうまく交ぜ合わせて作品を書いたことがよくわかる。

『漂民宇三郎』（昭和二十九年四月～昭和三十年十二月「群像」）も、これと似たような特徴をもつ。「漂民宇三郎」は、江戸天保年間、回槽船長者丸が仙台沖で大西風にあおられて遭難するところから始まる。船には宇三郎をふ

くめ、十一人の乗組員がいた。はるか西へ流された長者丸は、アメリカ捕鯨船に救助される。そしてハワイ諸島、カムチャツカ半島、アラスカなどを回り長い年月の末、エトロフ島へ送還される。宇三郎は日本へ送られる直前、仲間との確執のため、移民した恋人を頼ってハワイに戻り永住することを決心。残りの仲間は船旅の途中で四名が死亡、日本にたどり着いたのは六名だった。そのうえ、折から鎖国中の江戸幕府の厳しい取調べで二名が亡くなり、故郷までたどり着くことができたのは四人だった。

この作品にも、もともになる資料が存在する。江戸時代の文献『時規物語』と『蕃談』である⁽⁶⁾。「漂民宇三郎」の長者丸と乗組員のたどった運命は、これらの史実にほぼ忠実に展開している。ただし、主人公宇三郎のみが架空の人物なのである。のこり十名の乗組員はみな実在の人物だ。このほかにも「吹越の城」（昭和十八年十月『文芸読物』）がある。武田勝頼の出兵が攻められる様を描く短編だが、「吹越城」自体、武田軍の出兵として存在せず、また登場する武士三人も架空の人物である。

このように、井伏はそれが資料なのか創作なのか、読

み手には一見してわからないように交ぜ合わせ作品を作っている。井伏作品について、随筆が小説のようであり、小説が随筆のようである、という印象は多くの読者が持つものに違いない。井伏が見せかけの資料を作ったまで創作と資料を交ぜあわせた意図は何なのだろう。

五 結論

以上のように、資料の内容をそのまま用いるだけでなく、自らも史料をかき集めるように取材する方法からは、資料の意味・内容に執着する書き手の姿が見えた。形式までも日記や文献の形にする行為からは、資料それ自体の性質、客観性やリアリティに惹かれる井伏が見えた。それは資料至上主義や、考証趣味をあらわしているとも言えるし、資料をそのまま使う点だけ見れば、創作における怠惰のようにも見える。とはいえそれが井伏の資料至上主義や、創作の怠惰と即つながると考えることは早計なのではないだろうか。そもそも資料の内容を重要視する姿勢と、資料の形式でフィクションを作り出す行為は矛盾している。たとえば、もし史実至上主義者なら偽

の歴史を作ることはゆるさないはずだし、歴史は背景にとどめ、自由に想像をめぐらした歴史ファンタジーを創作したい作家なら、史実に執着し、資料にのめりこんで、ストーリーを拡散させることはないうえ、わざわざ資料の形式を維持した作品を書く必要もない。にもかかわらず、井伏の作品からは史実、資料への神聖視とも取れる部分と、見せかけの資料を自由に創作するという部分のアンビバレンツな行為が両立しているのである。

この交ぜ合わせするという行為の意味は何なのか。実物の資料と、見せかけの資料が一つの作品の中でどのような扱われていたかもう一度見てみよう。井伏は作り物語をも疑似資料化している。たとえば先ほど見てきた「青ヶ島大概記」では、宇野氏の分析が示すとおり井伏オリジナルの十個のエピソードが擬古文体で「八丈実記」という実在の資料に紛れこんでいる。「漂民宇三郎」では逆に、『時規物語』と『蕃談』のもつ資料そのものの性質は消され、現代語でわかりやすく書かれている。だがストーリーは実在の資料に忠実に進行し、個別の内容も資料に忠実である。そしてその中心に架空の人物宇三郎を

配置するという創作を行っている。「黒い雨」においても、閑間の手記や、十七章以降に登場する岩竹軍医の手記が、それぞれ実在の記録「重松日記」、岩竹博士の「広島被爆軍医予備員の日記」に依拠していつつ、創作である矢須子の日記もそれらと同じく日記という形にしてそれらの資料に沿わせて表現している。こうして井伏は相反するはずのフィクションとノンフィクションを常に等価に扱い、同等に交ぜわせ、そしてその方法を長年維持していたのである。「史実ものについて」（昭和十年十二月十六日『帝国大学新聞』）で井伏はこのように言う。

しかしながら史実とは不思議なものである。われわれの手では改訂できかねるほどその前後左右を他の幾つもの史実によつて有機的に取り囲まれてある。いひかへれば、史実は過去における現実の輪郭である。事実の一方的素描である。乃至は動かすことのできない大嘘である。」

井伏は史実を「動かすことの出来ない大嘘」と考えている。真実として疑わざるべき歴史を一方でみとめつつも、疑わざるべき史実を「大嘘」だと言う。一般的には

史実とフィクションを等価に扱うことはできない。歴史が真実であるということは誰にとつても疑わざるべきことだ。しかし井伏はくりかえし資料をそのまま用いて、わからないようにまるで本物のようにフィクションを混入させる方法をとった。これは故意の作業ではなかっただろうか。そしてこれは真実としての歴史にたいしての挑発的行為でもある。歴史を「大嘘」というときの井伏は、歴史の動かせない真実としてのありかたに対して何らかの批判精神を抱いていたのではないか。こうした恣意的にフィクションとノンフィクションを交ぜあわせる行為の中に、井伏の歴史にたいする挑発的な認識、批評精神の現れを推測することが出来るのである。

注

(1) 江藤淳は「原爆をどんなイデオロギーにも曇らせぬ眼で」直視し「平常心をつらぬきとおして原爆」という異常時を語つて成功した」という。(『朝日新聞』夕刊 文芸時評一九六六・八・二五)

(2) 平野謙は「構成が整然としていない」(『九月の小説』

『毎日新聞』夕刊 文芸時評一九六六・八・三二)と、以降の論点となる構成上の問題について最も早く言及しながらも、作品には一定の評価を与えている。

- (3) 重松氏と同じく被爆体験を持ち、友人でもある豊田清史氏が『「黒い雨」と「重松日記」』(一九九三・七 風媒社)を発表、「黒い雨」が重松静馬氏の日記を大部分引用していると井伏の「盗作」を糾弾した。猪瀬直樹も豊田氏の論を支持しながら「ピカレスク太宰治伝」(一九九九・九『週刊ポスト』)などで井伏批判をくり広げた。

- (4) 相馬正一が日記原本を『重松日記』(二〇〇一・五 筑摩書房)のかたちで刊行して以降、論争は下火になったといえる。

- (5) 田辺健二は『武州鉢形城』から『黒い雨』へ(『井伏鱒二研究』磯貝英夫編 溪水社 一九八四年)で、「昭和三十六年から四十一年にかけての井伏の文学活動は『武州鉢形城』の実験をへて『黒い雨』を完成させたものとして概括することが出来るであろう」と指摘している。

- (6) 『武州鉢形城』の創作過程(『私注 井伏鱒二』昭和五十六年一月 明治書院)

- (7) 『「黒い雨」論—原爆文学とリアリズム—』井伏鱒二の文学』一九八〇年九月 法政大学出版局

- (8) 『井伏鱒二論』冬樹社 昭和五十三年五月

- (9) 寺横武夫は『「黒い雨」注解』で、「事実の横溢によって、小説の均衡はどうなるか」と、問題を提起し、「弥須子の日記は最初の2章まででたち消えになるため、『姪の結婚』と言う話題、つまり全体のストーリーとなるはずの世界は細部に散らされ、かき消されていく傾向を呈してくる」と指摘している。

- (10) 相馬正一編『重松日記』(平成十三・五・二十五 筑摩書房)の「付録」に収録されている。重松氏による井伏宛書簡は掲載されていない。

- (11) 『井伏鱒二「黒い雨」』『解釈と鑑賞』一九七三年八月

- (12) 「社交性」『小説公園』昭和三十一年十月

- (13) 『井伏鱒二事典』平成十二年 明治書院

- (14) 井伏鱒二・河盛好蔵「作家の素顔—河盛好蔵連載

対談9〕『小説現代』昭和四十年九月 講談社

(15) 『井伏鱒二研究』磯貝英夫編 昭和五十九年 溪水社

(16) 涌田佑は『井伏鱒二辞典』(平成十二 明治書院)で「井伏は江戸期の文献『時規物語』『蕃談』に拠りつつこれを執筆したが、主人公の宇三郎は架空の人物」だと述べている。